

アイヌ語の衰退とあいさつ言葉

切替英雄

2019年7月21日

1 言語の死滅

アイヌ語を思うとき、言語の死滅という問題が私たちの胸から去ることがない。

平安時代、京都の住民たち（その階層は問わない）の間で行われた言語（これを仮に平安語と呼ぼう）は現在誰も使っていない。だからといって平安語は死滅した言語、とは普通いわないのではないだろうか。平安以降もいろいろな方言の話し手が都に集まって住み着いたから、都の言語はそれからさまざまな影響を受けたであろう。同時にほかからの影響によらないくても、時間とともに自然に被る変化もあったに違いない。だとしても今なお口頭で伝承されつつある。だから平安語が死滅したとはいいいにくい。

ローマの庶民が使っていた言語もロマンス諸語とよばれるフランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・ルーマニア語およびその亜種という後継の言語へと変遷を遂げているから、今は話す者がいないけれど死滅した言語とはされないであろう。

平安語もローマの言語も一部の階級の言語が文語として固定し、今でも学べばある程度使いこなせるようになるが、それは今いう言語の継承とは別の問題である。言語の継承とは、まず口頭で使われる日常語の伝承・継承でなければならない。

ちなみにアイヌ語には確立・固定した文語がない。ユーカラの言語がそれに比定せられたことがあるが、たぶんその類推は誤りである。ジョン・バチェラーの新約聖書の翻訳は労作ではあるが、アイヌ語としては破格すぎて、ラテン語や古代教会スラブ語やルターの高地ドイツ語のように、アイヌ語の復活を志す人々にとって手本とするに足り、さらには共通語の形成のための基礎として依拠しうる文語にはならないであろう。残念なことである。

2 アイヌ語の衰退

一九一七年（大正六年）、北海道庁は一種の言語調査を行っており、その当時約三五〇名の「和語を解せざる者」がいたと報告している。つまり、少なくともそれだけのアイヌ語のモノリンガルがいたことになる。その周囲には、はるかに多くのバイリンガルがいたことは間違いない。つまり、アイヌ語は、一九一七年前後、まだまだ日常の言語として盛んに行われていたと考えられる。この時代、安定的かつ恒常的なバイリンガリズムが維持できる可能性は既に失われていたのであろうか。それとも多数派民族のただ中に生きざるをえない少

数民族のバイリンガリズムは、その言語が死滅に至る過程にすぎないのであろうか。だが、こうしたアイヌ語の盛衰を考える場合、伝統的なアイヌの生活がまだ息づいていた時代についてできるだけリアルに思いを巡らす必要がある。

3 希薄な人口

八万三千平方キロメートルの北海道（デンマークの一・九倍）は、現在およそ五五〇万人の人口（デンマークは五二〇万）を抱える。アイヌの人口は松前藩領の蝦夷地が幕府の直轄地になった一九世紀の初め頃からぼんやり知られるようになったが、多少とも信頼できる史料によると、一九世紀から二〇世紀初めにかけて二万から一万五千の間を変動している（樺太は除く）。つまり、とても少なかったのである（これぐらいの人口が北海道の自然が養える限界なのか）。しかも分布に偏りがある。民族学的研究の集中した日高西部の沙流川流域の人口は極めて、例外的に大きく、狩猟・採集を生活の基盤とした北方の民族としては異例の居住形態をとる（ただし、金田一京助が沙流を「アイヌの都」と呼んだのは、アイヌには独自の国家、共通語がなく、沙流の文化がスタンダードなものであったわけではなかったから、誤解を招く表現であった）。その沙流を例外とすれば、たとえば、宗谷、天塩、大雪、阿寒、斜里の山々に南を限られた、宗谷岬から知床にいたる広大なオホーツク沿岸地方（いわゆる北見国）のアイヌの人口は、一八七七年（明治一〇年）には一四一であるが、この地方の植民地化が進んだ一九二五年（大正一四年）には六四五を数えるのみである（同年の北海道のアイヌの総人口は一五九四一）。しかもコタンと呼ばれる集落は一戸から二、三戸で形成されているのが最も普通だった。アイヌ語を考えるときには、このように疎に展開する人々の生活を常に頭に置く必要がある。

4 挨拶言葉の未発達

たとえば、アイヌ語教室で最初に言っておかなければならないことの一つに「おはよう」だの「こんにちは」だの「さようなら」に当たる挨拶言葉がないということがある。考えてみればこのような挨拶言葉は貨幣のように便利である。人との出会いと別れにさいして、いちいち頭を悩ますことなく、出来合いの挨拶言葉を繰り出せば一通りの礼を尽くしたことになる。複雑・多忙な現代生活では是非とも必要な言葉であろう。しかし、アイヌではこのような定型の挨拶言葉が発達しなかった。それはなぜかというと、人との交渉がまれであったからだと考えられる。出会いというのが私たちには想像もできないほど重大な事件であって、礼を交わすにあたって、とても出来合いの定型句ですまされなかった。会見・別離の辞にいちいち頭を悩ます必要があったのである。

「イランカラプテ」という言葉があるではないか、という人がいるかもしれない。しかし私は一九七四年にアイヌ語の研究を始めてから今に至るまで、アイヌから「イランカラプテ」と挨拶されたことは一度もない。金田一は「イランカラプテアイヌをにっこりさせる一言」（昭和一一年、全集一四）というエッセーで、明治四〇年頃の沙流から千歳に至る山間

部で、また、大正七年頃の樺太の諸処で、さらに年代はよくわからないが釧路の春採^{はるとり}近くで、道々、アイヌに「イランカラプテ」と声をかけた思い出を書いている。たとえば、「春採の手前で、二、三人連れの女たちの、面俯がちにすれ違うのを、例の気軽に「イランカラプテ」とよびかけたら、年長らしいのが、くすりと少し笑って、口の中で同じく、「イランカラプテ」といって行く。」(一七九頁)。このようなときは、「何もいわずに黙って、顔を見かわしてすれ違う」(一七八頁)のがアイヌの流儀であると金田一は記している。この言葉はもともと「昵懇の間柄の長く会わなかった久闊の会見などに、「なつかしや」と涙を流しつつということばである。」(一七八頁)とも書いている。そうであるなら、気軽にイランカラプテと言葉をかけられたアイヌが「にっこり」と、あるいは「くすり」とほほえんだ理由を、和人(シサム)の旦那(ニシパ)がきれいなアイヌ語で挨拶してくれたから、当時和人から卑しめられていたアイヌにはうれしかったのだろうととるのは、単純すぎる解釈に思える。ともあれ、イランカラプテは近代化ないし植民地化しつつあった北海道のアイヌの間で手軽に使える挨拶言葉へと変貌を遂げることはなかった。それは、アイヌ語が時代の波に乗れなかったことを象徴的に示していると私には思える。

5 潜在的バイリンガル

明治・大正期の子供たちの多くは、アイヌ語と日本語のバイリンガルであったと推定される。ご存命になる高齢のアイヌの多くは、幼年期、アイヌ語で育てられた経験があるに違いない。しかし、同化主義が人々の心に厚く垂れ込めていた時代であったから、例外もあるけれど、子供たちは祖父母、両親の言葉に心を閉ざし、その傾向は学童期にさらに深められたに違いない。その結果アイヌ語の発達が阻害され、今ある高齢の方々のほとんどはアイヌ語の使えない、いわば潜在的なバイリンガルとなったと思われる。言語の死滅とは、このような潜在的バイリンガルの最後の人の死をもって言うことであって、それがいつになるのかは誰にもわからない。気づかれずに消えていくのであろう。

6 日常語と口承文芸の言語の研究

一九五〇年代から服部四郎によって始められた日常語の研究は、金田一以後のアイヌ語研究を一新するものであった。服部以降の研究によって日常語は壊滅を免れ免れたとって過言ではない。服部が指導した基礎語彙調査によって方言差異も歴然となった。服部の弟子たちによって、いくつかの方言の日常語の記述的研究が進められた。

服部以前は、口承文芸のアイヌ語の研究に注意が向けられていたのである。金田一は、ユーカラなどの口承文芸に興味を持ち、かつ人類史に記憶されるべき文化的価値があると信じていた。もっとも、金田一のユーカラ翻訳が日本の読書界に迎え入れられたという話は、残念なことにほとんど聞かれない。

ユーカラの言語と日常の言語は別の言語ではない。また、ユーカラの言語がより古いアイヌ語の姿をとどめているという証拠はない。一音一句違えずに伝承されてきたという証拠

は全然ない。ただ、ユーカラの言語では、美しいアイヌ文様を彷彿する彫琢の行き届いた動詞の形態論的構造が見事である。アイヌには語根、接頭辞、接尾辞を複雑に結合させた複合語を創造的に作る習慣があった。それはユーカラの言語において顕著である。私たちは「達意の文」というようなことをしばしばいうが、ユーカラを読めば「達意の語」に出会い、息をのむことが多い。このようなことは、金田一によって初めて明らかにされたのである。

ユーカラの語法に魅了された金田一が日常語にさして注意を払わなかったのは、しかたのないことであった。しかしもっと早くから日常語の研究が基礎となるべきであった。形態論的構造のうち、金田一の段階で未解明だったところは、一九五六以降、服部の弟子である田村（福田）すゞ子が沙流方言研究に基づいていくつ解決している。だが今後解明の待たれる点も残っている。

『国文学解釈と鑑賞』 特集 危機言語としてのアイヌ語と琉球語
第75巻1号 志文堂 2010年（平成22年）1月 61-65頁
改稿 2012年11月19日

この小文の表題は上村幸雄氏に与えられたものである。おそらく氏のご期待には沿えなかった内容になっている。